

氏名 田高 悦子

本論文は、地域（在宅）の痴呆性高齢者における、回想法とリアリティオリエンテーションを取り入れたグループケアプログラムの有効性を無作為化臨床比較試験により明らかにしたものである。本研究では、地域（在宅）の痴呆性高齢者（DSM-IVに基づき診断されたアルツハイマー病もしくは脳血管性痴呆）60名を無作為割付により介入群 30名、対照群 30名とし、介入群に対しては、回想法とリアリティオリエンテーションを取り入れたグループケアプログラムを実施し、一方、対照群に対しては、標準的なデイケアプログラムを実施することによりグループケアプログラムの有効性を検証し、以下の結果を得ている。

1. アルツハイマー病高齢者に対する効果

認知機能（MMSE）では、総合得点に有意な介入効果は認められなかった。一方、日常生活機能（MOSES・Vitality Index）では、「引きこもり傾向」ならびに「意欲」の領域の改善に介入効果の傾向が認められた。測定時点ごとにみると、介入直後の「引きこもり傾向」ならびに「意欲」の領域では、介入群に対照群と比較して改善の傾向が認められた。一方、介入6カ月後の同領域では、介入群と対照群との間に有意差は認められなかった。

2. 脳血管性痴呆高齢者に対する効果

認知機能（MMSE）では、総合得点の改善に有意な介入効果が認められた。測定時点ごとにみると、介入直後では、介入群に対照群と比較して有意な改善が認められ、介入6カ月後では、介入群に対照群と比較して改善の傾向が認められた。一方、日常生活機能（MOSES・Vitality Index）では、「失見当識」、「引きこもり傾向」、「意欲」の領域の改善に、有意な介入効果が認められた。測定時点ごとにみると、「失見当識」では、介入直後および介入6カ月後ともに介入群では対照群に比較して改善の傾向が認められ、「引きこもり傾向」および「意欲」では、介入直後および介入6カ月後ともに介入群では対照群に比較して有意な改善が認められた。

3. 家族介護者に対する効果

家族介護者の痴呆性高齢者に対するアフェクトバランス（ABS-FC）では、アルツハイマー病高齢者の家族介護者ならびに脳血管性痴呆高齢者の家族介護者ともに、有意な介入効果は認められなかった。すなわちベースラインより介入6カ月後までの観察期間中、アルツハイマー病高齢者の家族介護者では、ネガティブバランス（否定的感情）にて経過し、脳血管性痴呆高齢者の家族介護者では、ポジティブバランス（肯定的感情）にて経過し、ともに時間的变化は認められなかった。

4. グループケアプログラムの有効性

上記の知見より、回想法とリアリティオリエンテーションを取り入れたグループケアプログラムは、アルツハイマー病高齢者に対しては、日常生活機能（引きこもりおよび意欲）の短期改善傾向に有効であり、また脳血管性痴呆高齢者に対しては、認知機能の短期の有意な改善ならびに長期の改善傾向、および日常生活機能（引きこもりおよび意欲）の短期ならびに長期の有意な改善に有効であり、地域（在宅）の痴呆性高齢者において、適用性の高い有用なプログラムであることが示唆された。さらに、これらの効果を持続させるためには、継続的なケアによる介入の必要性があることが提言された。

以上、本論文では、いまだ根本的な治療法が確立されていない痴呆症において、症状の進行を予防し、痴呆性高齢者と家族介護者双方の QOLを可能な限り維持、向上させ得る、十分に有効性が検証されたケアプログラムがほとんどない点に着眼し、回想法とリアリティオリエンテーションを取り入れたグループケアプログラムを開発し、その有効性を厳密かつ高次の研究デザインによって、地域（在宅）のアルツハイマー病ならびに脳血管性痴呆の高齢者において明らかにした点に、独創性が認められる。かつ本論文では、検証されたグループケアプログラムが地域で適用性の高いプログラムであることを示すとともに、効果を持続させるためには、継続的な介入が必要であることを提言している。よって、本論文は、将来における地域（在宅）を拠点とした痴呆性高齢者に対するプログラム開発の際に重要な貢献をなすと考えられる点で、臨床上の有用性をも兼ね備えており、学位の授与に値するものと認められる。